

メッセージアウトライン 創世記32:22～32「神との格闘」

ヤコブはかつて、兄が受けるはずの父の祝福を欺きによって奪い取り、その結果、彼に対する殺意を持った兄エサウが四百人を引き連れてやってくるとの報を受け、恐れた彼はマハナインで神の約束のみことばにすがって、神の守りと助けを祈り、そして多くの家畜の贈り物をもって兄をなだめようとした。しかし、彼には依然として平安はなく、恐れがあった。彼は兄エサウと再会しても大丈夫との神からの確信を与えられる必要があった。

[22-23]「その夜、彼は起き上がり、二人の妻と二人の女奴隷、そして十一人の子どもたちを連れ出し、ヤボクの渡し場を渡った。彼らを連れ出して川を渡らせ、また自分の所有するものも渡らせた」

「ヤボク」は「流れる」という意味。これは北のガリラヤ湖から南の死海に向けて流れるヨルダン川に向けて、東から流れ込んでいる川。ちょうどガリラヤ湖と死海との中間地点にある。「渡し場」川を渡るのに適当な場所。浅瀬。ヤコブがなぜこのような行動をしたのかというと、もしも昼間、川を渡っている途中、エサウに襲われたら彼の家族が全滅してしまうと考えたのではないか。それで夜のうちに川を渡ってしまおうとしたのであろう。これも克服できない不安と恐れゆえであった。

[24]「ヤコブが一人だけ後に残ると、ある人が夜明けまで彼と格闘した」

ヤコブが一人だけ後に残ったのは自分だけの安全を考えたからではなく、何としても解消できない恐れと不安のため、切実な祈りの必要を感じたからであろう。

「ある人が夜明けまで彼と格闘した」この人物はヤコブの前に突然現れた。身内でもない。かといって家畜泥棒でもなさそうである。しかし、その人は無言でヤコブと格闘を始めた。ヤコブにとっては見知らぬただの人のように思われたが、しかし、この人はただの人ではなかった。これは後でわかるが神の使いであった。神からの使命を果たすために必要な時に現れ、その目的を達すると姿を消す。聖書にはしばしばこのような人としての姿で神の使いが現れている。→創世記19：1、使徒12：7

この格闘は夢や幻ではない。激しい肉体的な消耗をとまなうものであった。この格闘は夜明けまで何時間も続いた。

[25]「その人はヤコブに勝てないのを見てとって、彼のももの関節を打った。ヤコブのももの関節は、その人と格闘しているうちに外れた」

その人はいくら格闘してもヤコブに勝てない。これは人間の強烈な自我による肉の努力、抵抗が強力であり、そのままでは神の支配は及ばないということを示している。それでその人はヤコブのももの関節を打った。すると彼の関節は格闘しているうちに外れてしまったのである。「ももの関節」とは足と腰をつなぎ、肉体を支える重要な部分である。これは霊的には自我を象徴しているものと思われる。

この人はヤコブに勝てないという人間的な限界を示す一方で、彼のももの関節を外すという恐るべき力も示す。このことによってヤコブは自分が格闘している相手はただの人ではなく、彼のマハナイムでの祈り(32:9~12)の答えとして現れた神の使いであることにはっきりと気がついたであろう。

[26]「すると、その人は言った。『わたしを去らせよ。夜が明けるから。』」

これはヤコブが明るさの中で彼を見て死ぬことがないためである。神は聖いお方なので、罪ある人間が見ると死ぬと聖書ではしばしば教えている。→出エジプト33：20、士師記6：22~23、13：22

「ヤコブは言った。『私はあなたを去らせません。私を祝福してくださらないければ。』」ここでヤコブは切に祝福を求めている。求める相手は家畜泥棒でも敵でもなく、彼に祝福を、そして兄エサウとの再会に平安と確信をもたらすことのできるお方なのである。

[27]「その人は言った。『あなたの名は何というのか。』彼は言った。『ヤコブです。』」

ヘブル人にとって名は実質を表すものであった。それで名を問われるということは自分が何者であるかということを示すことになる。「ヤコブです」これは「かかと」という意味であり、ふたごの兄エサウのかかとをつかんで母の胎内から出てきたことに由来する。→創世記25：26 兄エサウは後にヤコブに欺かれ、父からの祝福を横取りされたとき、このヤコブに「押しつける者」という意味付けをしている。→27：36 まさに今までのヤコブの人生がそうであったのである。

[28]「その人は言った。『あなたの名は、もうヤコブとは呼ばれない。イスラエルだ。あなたが神と、また人と戦って勝ったからだ。』」

ここでヤコブは新しい名が与えられる。「イスラエル」…「神は戦う。神と戦う」の意。イスラエルの名はこの後、彼の子孫が形成する契約の民の名前となる。この人はこの格闘においてヤコブの勝ちを認めた。「人と戦って勝った」とは神の使いが人としてこの場に現れて、戦ったのでこのように言うのであろう。実際には神ご自身が負けるということはありませんので、ここには神の大きい恵みが示されているということがわかる。ヤコブをこのように導き、このように格闘させ、それに勝たせたのはすべて神のご計画、みこころ、恵みであったのである。ヤコブの生涯にはこのように神の恵みがともない、

先行しているのであった。

[29]「ヤコブは願って言った。『どうか、あなたの名を教えてください。』すると、その人は『いったい、なぜ、私の名を尋ねるのか』と言って、その場で彼を祝福した」

その人は自らの名について答えない。このことは、神の主権に属することであり、名を教えないということより、「その場で彼を祝福した」ということの中にすべてが含まれているように思われる。人を祝福できるお方は、まことの神以外にはいないのである。

[30]「そこでヤコブは、その場所の名をペヌエルと呼んだ。『私は顔と顔を合わせて神を

見たのに、私の命は救われた』という意味である」

「ペヌエル」直訳は「神の御顔」の意。「私は顔と顔を合わせて神を見たのに、私の命は救われた」これは神を見た者は死ぬはずなのに、死ななかったことへの驚きと、神と格闘したことによって得た祝福のすばらしさゆえの賛美を込めてこのように意味づけしているのであろう。

[31]「彼がペヌエルを通り過ぎたころ、太陽が彼の上に昇ったが、彼はそのもものために足を引きずっていた」

これは神に取り扱われ、砕かれたことを示す。それは敗北であると同時に勝利であった。人間的な自我による努力の敗北、そして信仰による勝利であった。

[32]「こういうわけで、イスラエルの人々は今日まで、ももの関節の上の、腰の筋を食べない。ヤコブが、ももの関節、腰の筋を打たれたからである」

後のイスラエル人にとって、ヤコブのこの経験は彼らの食生活において、動物の肉を食べるときの禁止事項となり、これは神にささげられたものとして祭司のものとなった。

→ I サムエル9：23~24

このようにして神の祝福を得たことにより、ヤコブは確信をもって兄エサウと再会することになる。

このヤコブのヤボクの渡し場での神との格闘は祈りの型である。私たちもそれぞれの人生において人間的な知恵や努力ではどうすることもできないところまで追い込まれることがあるだろう。そのような時、出口はただ一つ。祈りにおいて神にすがりつき、神と格闘することである。信仰を働かせ、主なる神のみ前に出て、みことばの約束をもって神に迫り、神と格闘するように祈るのである。簡単にあきらめてはならない。困難な状況に置かれるようにされたのも神であるならば、私たちもヤコブのような熱心さ執拗さを持って神にすがりついていかなければならない。望みをすべて神において、祝福してくださいとあなたを去らせませんと祈り続け、たたき続けることが大切である。その時、私たちの自己中心や自我への執着といったものが砕かれ、神の祝福と平安と、祈りが答えられたことの確信が与えられるのである。→マタイ7：7~11、ピリピ4：6~7、ローマ12：12